

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十年十二月一日発行（毎月一回一日発行）
第十五卷第八号（通巻第一七六号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第176号

12. 2008

乳足り児

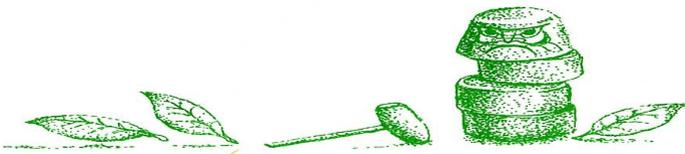
品川 鈴子

湯気たてゝ待ち赤ん坊と顔合はせ

暖房車ベルト縛りの児がぐづる

乳足り児の毛糸の靴に滑り止め

毛糸の嬰「あい」と声洩れ四肢燥ぐ



手袋も指環もはづし赤児抱く

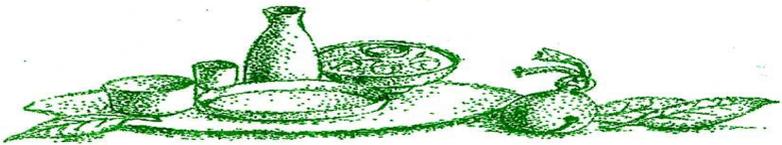
急に吐き流感かはた妊みごもりか

舞扇手擦れを納む時雨宮

数へ日に玻璃越しミイラまのあたり

咳せき呖ふミイラの鼓膜震ふかと

雪こぼる好爺良漢また帰天



玉

鈴

吟

東京 片野光子

京言葉そへお通しの菊膾
栗届き挑んでをりぬ渋皮煮
回り道ゆるり家路を月今宵
子規庵にあるじ偲ぶか鶏頭花
そよかぜに囁くごとし秋桜

兵庫 勝野 薫

爪蓮華崖の其処ここ湖は秋
涼新たジャズ聞き乍ら厨ごと
つづれさせ汝も眠れぬか鳴き徹す
松手入庭師も傘寿高梯子
大早橋の現はる呑吐ダム

兵庫 金田美恵子

冬の日をほしいままなるサンルーム
秋の蝶横断歩道渡り切る
宴席にぬつと顔出す神の鹿
踞る遠眼差しの神の鹿
神鹿の人に馴れたる眼と合へり

兵庫 唐鎌光太郎

六甲の荒ぶる川となる夕立
ウオーキング残る暑さの昼日中
秋涼しむくりと起きる路地の犬
離れ住む子らを促し墓参り
一隅に姿くつきり曼珠沙華

兵庫 川合まさお

海神に嘉永の狛犬新松子
鯨日和糶値を隠す仕分箱
地藏盆潮入川の橋開く
夏萩や「牢の御所」跡葉仙寺
託老所の友も顔出し大根蒔く

大阪 河村 泰子

太極拳の爪さき秋の虹に向く
秋虹を寡黙の父に教へられ
臨月の人を笑はす秋の虹
秋虹をしぼし留めむ奥琵琶に
秋灯下かしこかしこと母の文

東京 岸 はじめ

露草の目に沁む藍でありにけり
吹き抜ける風の手触り野分立つ
花野来て花の匂ひに疲れけり
地口絵に笑ひ秋扇畳みけり
団栗を踏みたじろぎし神の森

東京 北川とも子

鱗雲うすうす夜を覆ひけり
いなびかり夜の真中を切り裂けり
桐一葉枷ひとつ身を離れゆき
静かなる時を湛へて白芙蓉
かなかなの鳴き声確と個性あり

東京 北畠 明子

斜交ひに体かはして冷房車
蜥蜴来て横目づかひに我を見る
ワルナスビへクソカヅラも刈られけり
敗戦 日後 期 高 齢 少 国 民
洪水警報明けて軽鴨羽繕ひ

兵庫 木原 今女

どんぐりは子等の魔法に独楽となる
敬老会ダーツの的は細分に
ゲートボール優勝逃す葛嵐
愚痴に慣れ夫はうとうと秋時雨
妻籠へと下る軒下小豆干す

兵庫 木村 美猫

盂蘭盆経末座に膝を崩しをり
うす闇にうごめくものよ鏡花の忌
父看取る母にほつこりふかし諸
千年の樟に大瘤秋のこ糸
秋気満つ空を見つめる幼な目

愛媛 久保田由布

鳥の子親の言ふこと聞かぬなり
帰省人メモ見て口説く盆踊
盆踊唄に吾が住む小字の名
落し文結び目固きは恋文
毒を持つ錦まだらの穴惑

兵庫 藏元 博美

アンカーの孫迫りくる運動会
祈り終へ牧師帰りし夜長かな
リーン二回幼き鈴虫籠の隅
秋刀魚焼く匂の中の少女かな
蟋蟀の息切れしている露地の奥

兵庫 栗田 武三

丹波まで萩見に行つてきたと云ふ
そこゝに残る萩叢ニュータウン
花咲かせ少し傾く家に住む
萩叢の傍に重機の座してをり
路地奥の稲荷に通ふ萩の風

薬草歳時記

(一七五) カンアオイ (寒葵)

菅原由紀

NHK深夜便の冊子の中にこんな短歌をみつけた。

いま少し語り足りない思いあり

土に埋もれるカンアオイかな (鳥海昭子さん)

毎日の誕生日の花と花ことばが共に書かれていた。ある年の一月六日の花として。花ことばは「秘めたる恋」

この花は土に埋もれるようにそつと顔をだす花―花ことばのようにひっそりと。

関東南部から静岡、三重に至る山中の湿地に育つ常緑の多年草。葉は心臓の形をした緑色で白い斑点がある。花は暗紫色から緑紫色。一般の花とは異り「がく」が壺のようになり、その先端が三つに分かれ、それぞれが三角形である。地面近くで咲く暗紫色の花は、まるで果実のように見える。

地下茎を土細辛(ドサイシン)、杜衡(トコウ)と称して、薬用の細辛(ウスバサイシンの根茎)の代用になる。

細辛にくらべると、土細辛は辛味が少なくて使いやすい

ので、細辛と同じ目的で使われる。0.5から1.4%の芳香性のある精油を含む。主としてメチルオイゲノール、エレミシン、サフロール等のテルペン類を含んでいる。

薬用のウスバサイシンは根が細くて利用しにくいので、カンアオイの根茎が代用される。

細辛は、鎮静、解熱、鎮痛、去たん、鎮咳等の目的で使
用、麻黄附子細辛、大黃附子湯等に配剤されている。またこの液でうがいをするとう臭を消すのに役立つともいわれている。

カンアオイと同属のものは、日本各地にも多数あり、ときには薬用とされている。フジノカンアオイ、スズカカンアオイ、ヒメカンアオイ、コシノカンアオイ、サツマカンアオイ、タマノカンアオイ等々。それぞれの土地の名前がついている。多摩地方でしかみることの出来ない希少種のタマノカンアオイは現在、たまの里―さえずりの森―で見ることが出来るらしい。フジノカンアオイは南西諸島に点在する奄美島産の大型のカンアオイ。

カンアオイの葉は心臓形(ハート)をしていて、徳川の葵の紋そのものの形である。

参考文献

「原色日本薬用植物図鑑」木村康一・木村孟淳共著 保育社

「薬草手帖」田中孝治平凡社

「ラジオ深夜便誕生日の花と短歌365日」

著者略歴神戸薬科大学卒

カンアオイ [カンアオイ属] (うまのすずくさ科)

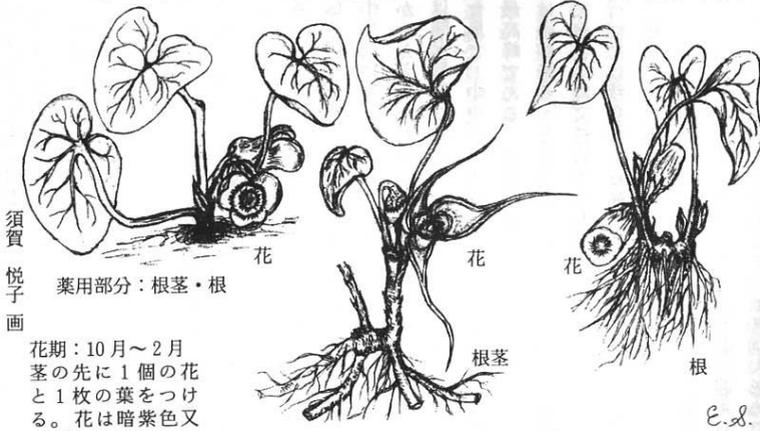
Asarum kooyanum Makino var. *nipponicum* (F. Maekawa) Kitam.

(寒葵)

ランヨウカンアオイ

オナガカンアオイ

キウイカンアオイ



須賀
悦子
画

薬用部分：根茎・根

花期：10月～2月
茎の先に1個の花
と1枚の葉をつける。
花は暗紫色又は
緑黄色を帯びる。

秘めごとに聞き耳たてゝ寒葵	秘めごとに聞き耳たてゝ寒葵	* 須賀悦子	* 塩出真一
仙人の跨ぎて通る寒葵	仙人の跨ぎて通る寒葵		
ひそやかさとは低咲きの寒葵	ひそやかさとは低咲きの寒葵		浅井久代
寒葵 枯山水の片隅に	寒葵 枯山水の片隅に		小宮山政子
息をひそめて声を殺して寒葵	息をひそめて声を殺して寒葵		櫻間ひろし
寒葵 日の斑は人の面テにも	寒葵 日の斑は人の面テにも		武藤 紀子
寒葵 かがめば影をふやしたり	寒葵 かがめば影をふやしたり		小田切輝雄
寒葵 胸中ふかく花を秘す	寒葵 胸中ふかく花を秘す		青柳志解樹
寒葵 塔は跡さへなかりけり	寒葵 塔は跡さへなかりけり		飴山 實
土人形乾して戸口の寒葵	土人形乾して戸口の寒葵		村上 鬼城

*は「くろっけ」

鈴の奏

品川鈴子選

傘立の甕門を出づ秋出水 兵庫 小松美保子

電柱にめんどり縊る秋出水

出水から牛上げられて牧日和

家族より気の合ふ二人栗をむく 兵庫 太田 實

古里の人老いにけりとしとの暮

放哉の句碑ひつそりと冬日和

酔ふほどに憂国の弁槽の人 大蕪を買ふてふ妻や旅の空 兵庫 土屋 青夢

中減りの俎板に盛る秋鯛

水虫の爪を隠して正座する

忘れし嬰の布靴露しめり

ナイロビに蚊帳を贈ると僧の発つ

盆用意終えて胃の腑にとどく水 兵庫 磯田せい子

石蹴つて進む沈黙相撲取草

荒磯に狗尾草の徒手体操

かぼちゃ煮てひとりの卓の幅をとる

一つ家の灯の洩れる終戦日 兵庫 吉本 淳

日の落ちし日本庭園虫王国
秋の夜の机の上の腕時計
誰を待つや白粉花の咲きそめぬ

つづれさせか細き声のよもすがら 兵庫 坊野貴代美

格子戸に足かけ反りていぼむしり

深更の人の声する庵の月

追いかけてつづく子別れ親鴉 大阪 宮村フトミ

またしても愚痴つぽくなり水を打つ

捕れぬ子にせめて空蟬捕らせやる

シンク口の手足の捌き水中花

姉妹とてほどよき距離を冷奴 兵庫 長瀬 節子

チチ口鳴く遺影の母は若々し

主なき夏草茂る生家跡

隠沼連なり渡る糸トンボ

羊牧場芝より高く小判草

夕立の銀座路地裏走り抜け 東京 松本 アイ

再びの地震に青田の水涸るる

秀 鈴 記

電柱にめんどり縋る秋出水

小松美保子

出水とは夏出水、梅雨出水とも言う仲夏の季語で、河川の氾濫や山からの鉄砲水も怖い。台風の水は秋出水と呼ぶ。

水害の渦中では家畜や家財道具も次々と激流に翻弄される。とある電柱の高い処には、声も出ずに命からがらしがみつく鶏。雄鶏ならばとさかを振りたてて大声で助けを求め術もあるうが、ふふみ鳴きの雌鶏では無粋な電柱に縋るほかない、その滑稽な恰好は、生ある者の哀れを物語る。

大蕪を買ふてふ妻や旅の空

太田 實

永年連れ添うた夫婦が水入らずでやつと旅にでた。せめてその間は家事や仕事から開放されて、王侯気分で寛ぐつもりだった。ところが旅先で素晴らしい大きな蕪と出くわした。その途端に料理達者な古女房に戻ってしまった妻が、大蕪を買おうと言いだした。こう云う家庭的な面が愛すべき長所なのだが、この重い荷を持つ役に、お鉢が回ってくる

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 藤田かもめ //

*選句は全て 品川鈴子

だろうと困惑の連れ合い。でも止めたりせず協力する覚悟の優しさ。

ナイロビに蚊帳を贈ると僧の発つ

土屋 青夢

ナイロビはアフリカ東部、ケニア共和国の首都ですが、内陸の高地には蚊が多い。蚊はマリリヤの媒体として悩まされている。そこで僧侶が日本の蚊帳を贈る奉仕活動に出発した。ナイロビに程近いビクトリアへ私も2002年に滝見で訪れた折は、密林に建つ宮殿まがいのホテルでは、ロビーも寝室も至る所に渦巻き蚊取線香（キンチョール）を燻らしていた。聞けば日本の除虫菊で作った昔ながらの線香しか効き目がない蚊だとか。化学薬品では退治できないそうです。

荒磯に狗尾草の徒手体操

磯田せい子

狗尾草は「ねこじやらし」の名で親しまれる。花穂は三〜六センチで、子犬の尾を思わせる。

えのしんくろ
狗尾草と風を取り合わせた句の先例はあるが、掲句は風を表面に出さずに、花穂の「しなやかさ」を詠んでいる。徒手体操は器具、器材を用いないで行う体操。この堅い四字を逆手にとつて花穂の「しなやかさ」を表現したところが心憎い。

誰を待つや白粉花の咲きそめぬ

吉本 淳

白粉花の花の色は紅、黄、白、絞りなど。花は夕方から開き、朝にはしぼんで落ちる。この句、白粉花の擬人化で「誰を待つや」という問い掛けが面白い。この白粉花の花の色が、紅か、黄か、白か、どれだろうと考えてみるのも観賞の楽しみの一つ。

追いかけてつづく子別れ親鴉

坊野貴代美

この句は鴉の子別れ。「獅子の子落とし」の俗諺を思い出した。

シンクロの手足の捌き水中花

宮村フトミ

シンクロは厳密にはシンクロナイズド・スイミング。つまり、水中バレー。音楽に合わせて、さまざまな泳法を

見せ、その美しさを競う。水中花は水に入れると、水を吸って開き、草花の形になる造花。元来は鮑屑かんせきで作った。掲句、シンクロから水中花への連想飛躍。

隠沼連なり渡る糸トノボ

長瀬 節子

「隠沼は通常「こもりぬ」と読む。意味は「草木などに隠れて見えない沼」。この句では「隠沼を」とすべきところを隠沼（こもりぬま）と読んで、上五で切っている。この点が気になるが、「糸トノボ」という季語が隠沼という恰好の舞台を得て、見事に主役を演じたのは作者のお手柄。

水打つてゆるりと過ぐすエコの知恵

松本 アイ

「エコの知恵」は「省エネの知恵」？。「打水はするが、クーラーは用いず」ということか。中七の「ゆるりと過ぐす」という表現は、ちよつと曲者。